

司波深雪にTSしてしまったのだが

からすみ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

?目が覚めると、超ブラコン系美少女に転生していた! 幸い、この体のもつ記憶のおかげで自分が男性なのか女性なのかの意識は曖昧だが……それでも、流石にお兄様との結婚ルートは嫌すぎる!!! 自立、自立しかない。最悪の未来(マテリアル・バーストは特に関係ない)を避けるべく、司波深雪は21世紀後半世界を奔走する!!!!

目次

第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
32	24	17	9	1

第1話

? TS。たとえば、元々男性だった人間が女性になること。その逆もあり得る。

?そして今、俺はその事態に直面していた。昨日まではしがらない男子大学生だった筈の俺。それなのに目が覚めたら、幼い少女になっていたのだ。

?眠る前まで、特に変な兆候は無かった。アニメを観ながら酒を飲み、意識も虚ろな状態で布団には入ったが……それもいつものこと。もしかしたら、そこで運悪く死んでしまったのだろうか。急性アルコール中毒とかで。

「でも……。女に転生って……なあ? ——それにしても……」

?そう眩き、自室にあった全身鏡の前に立つ。目の前に映るのは、下着姿の小学生一年生くらいの少女。まだ胸は小さいからか、ブラジャーはつけていない。せつかくなので、服を脱いで自分の身体を見ているのだ。

?しかし、何だか変な気分。バ美肉、ってこういうことなのだろうか。鏡に映る自分が、とても可愛いのは確かだ。けれども、どうも気後れする。一応、俺の筈なのに。

「どうしよう……」

?どうしていいか分からず、しゃがみこんで頭を抱える。

?その時だった。ノックの音が鳴る。そして、扉の向こうから「深雪さん?」という声がした。俺はハツとする。だって、今の自分は下着姿なのだから。慌てて、再び布団へと潜り込む。

「おはようございます、深雪さん。……あら?」

?部屋へと入ってきたのは、若い女性だった。とても人の良さそうな、穏やかな女性だ。

「どうしたの? いつもなら、私が入ってくるときには目が覚めているのに……具合でも悪い?」

?心配そうな顔をして、彼女は俺の額にそつと手を当てた。ひんやりしたその手は、何だかとても気持ちが良い。

「いつ、いえ……そうじゃないの。俺……じゃなかった。えっと、多分……私、あまりよく眠れていなくて」

？そう答えた瞬間、頭に様々な記憶が流れ込んできた。それが何なのか、直感的に理解する。これは少女の今までの記憶——その「知識」だ。

「うう……」

？キリキリと頭が痛む。叫び出したいほどの苦痛だ。人が横にいるということも忘れて、反射的に身体を丸める。

「深雪さん!? どうしたの?」

「痛い……。頭が、すごく……」

？途切れ途切れながらも、何とか症状を伝える。すると、「私」はなんだか気が遠くなってきた。頭に靄がかかったような、そんな感じだ。だから、身体の欲求に任せて目蓋を閉じた。



？目が覚めた「私」は、自分の身に何が起こったのかをゆつくりと思い出していた。先程流れ込んできた知識と、以前から持ち合わせていた自分の知識を照らし合わせることで、自分の身に何が起きたのかをハッキリ理解できるようになる。

？転生したのはどうやらアニメの中の世界らしい。というのも、「魔法科高校の劣等生」のメインヒロインである「司波深雪」になっていたのだ。正確には、成り代わったと言うべきか。

？原作での彼女は、とにかく容姿端麗で成績優秀。だけど、ちよつぴり……いや、恐ろしいほどにブラコンの少女。ことあるごとに、兄を褒め称えている。そんなキャラクターに!? ちよつと、荷が重すぎではないか。

？この「魔法科」世界では、血筋の良さがモノを言う。魔法の才能

の多くは、血統に依存しているからだ。魔法技能師開発研究所をルーツとする十師族を頂点とし、その後には百家などが続く。魔法師業界は、そうしたピラミッド構造である。

？そして、司波深雪の生家は十師族の一つである「四葉家」。つまり、天稟なる魔法師の才を約束されているということ。

？深雪の固有魔法は「コキュートス」。精神そのものを「凍る」という事象をもって停止する魔法。また、その才能は精神だけでなく現実にも影響を及ぼし、「冷却魔法」という形でも現れていた。その為、広域減速魔法「ニブルヘイム」などを原作の彼女はとても得意としている。

？魔法師としてならば、絶対やっていけるだろう。だが、それ以外の人生のことを考えると……どうだろうか。原作通りなら、私はあの「お兄様」との結婚ルートなのだ。普通に嫌である。

「——深雪さん、具合はどう？」

？部屋に女性が入ってきた。今ならば、彼女が誰なのかも分かる。桜井穂波——私の母である司波深夜のガーディアンであり、私達の身の回りの世話も請け負っている人だ。

「もう大丈夫……少し眠ったら、楽になったの」

「そう？　じゃあ、寝不足だったのね……食欲はある？　お昼は食べられそうかしら？」

？そう問われた途端、急に空腹を感じた。朝ごはんを食べていないからだろう。

「ええ……お腹が空いたわ」

「ふふ。じゃあ、持ってくるわね」

？穂波が持つてきてくれた食事を食べながら、私は状況を改めて整理する。

？自分の中にある知識では、この家——四葉家が用意したマンションである——に住んでいるのは、私と深夜、穂波の3人。達也は本家の何処かに押し込まれているらしい。

「まだ、あの『お兄様』は私のガーディアンに任命されていないのかしら。まあ、達也の魔法は基本は距離に依存しないから、単に訓練場に近い

場所で過ごしているだけかも」

？四葉家にある訓練場での戦闘訓練は、実戦に重きを置いた過酷な訓練である。四葉家の血縁の子女、また四葉に所属する使用人はそこで訓練を受けるのだ。

？だが、私はそれを義務付けられていない。戦闘訓練をしていない訳ではないが、大規模魔法による制圧作戦だけをピンポイントで学んでいる。魔法力の高さがあるので、他の方法はいらぬという理由らしかった。

「……いや、良い訳ないじゃん！」

戦術を固定化すれば、いずれパターンが読まれてしまう。誰も何も言わなかったのか。

？きつと、お兄様がいるからだろう。彼を厭う関係者達も「戦闘能力だけならば、四葉内でも随一を争う」と評価しているのだ。彼がガーディアンでいる限り、私が死ぬことはほぼ有り得ない。

？しかし、私は彼に依存する訳にもいかなないのである。そうなる、結婚ルートまっしぐら。絶望のゴールインだ。

だって、私は今でこそ女の子だけでも。元々の男の感覚も持ち合わせている。あの「お兄様」とあんなことや、こんなこと……考えるだけで、最悪だ。

「実力だ、実力を付けないと……」

？ボソボソと呟く私。やっぱり、必要なのは近接戦闘のスキルか。力押し一辺倒だけではない、技巧を凝らした戦い方が必要な気がする。

「……お母様に相談してみようかしら」

？食器の載ったトレーを持ち、ダイニングの方へと向かう。そこでは、穂波が食器の片付けをしていた。

「あつ、食べ終えた？ 言ってくれたら、下げてあげたのに」

「大丈夫、もう元気なもの。美味しかったわ。ありがとうね、穂波さん」

「いえいえ、どういたしまして」

？彼女は照れたようにはにかなかった。そして、「褒めてくれるなんて

珍しい」と言った。どうやら今までの深雪は、そういったことをあまり言わなかったらしい。言えよ。

「ところで……お母様は？」

「奥様ですか？ 今日はお加減の方もまずまずらしくって……ベランダでお茶を召し上がっていらっしやるわ」

「そう、ありがとう！」

「私はベランダまで駆け足で急ぐ。穂波の言う通り、深夜はティータイム中であつた。

「——お母様！」

「……深雪さん！ もう体調は大丈夫なの？」

「？わざわざ席を立ち、彼女は私の方へと近づいてきた。心配そうな顔で、私の額に手を当てる。

「はい、大したことなかつたみたいです。先程、食事を済ませましたし」

「良かったわ……」

「？椅子に座り直す深夜に合わせ、私もベランダの端にあつた椅子を持ってきて座る。

「そうそう、お母様。私、相談したいことがあるんです」

「相談？」

「？私は領き、話を切り出す。「近接戦闘のスキルを磨きたいのだが、どうすれば良いのか」ということだ。

「近接戦闘？ 必要ないでしょ、そんなもの」

「？あつさり切り捨てられた。まあ、深夜も四葉の関係者なのだから考え方の方針は同じなのだろう。

「そんなことないです。本当に近接戦闘スキルを使用する事態は私も考えていませんけれど、もっと『実戦』に対する覚悟みたいなもの……それが必要だと思えますわ。いざ魔法で人を殺さなくてはいけない時に、迷いで威力をセーブしてしまつては……。自分が危ないですもの」

「その為に、達也がいるんでしょう？ そうじゃないと、あれを貴女のガーディアンとして付けないわ」

「やはり、達也は既にガーディアンとしての任についているらしかった。穂波という時はともかく、単独で移動する時は達也が付いてくるのだろう。」

「でも……私、何だかイヤですもの」

「嫌って……。貴女、昔に真夜がどんな目に遭ったか分かってないの？」

「だからこそ、不意打ちに強くなるべきなのではないですか？ ガーディアンなんていたら、警戒心が薄れてしまいますわ。黒羽の……亜夜子ちゃんなどには、ガーディアンは付いていないではないですか」「黒羽と貴女は違うのよ」

「でも……私、亜夜子ちゃんに負けたくない！」

「思わず立ち上がり、机を叩く。そのお嬢様らしくない振る舞いに、深夜は目を剥いて娘を見つめる。」

「わたし自身もこの行動には、内心驚いていた。」

「後々考えると……元より「本人」が無意識に抱え込んでいた、同世代の女の子に対する対抗心がここで発露したのだろう。とはいえ、自分でそれを認識できるほど、今の私は大人でもなかった。」

「——貴女がこんな屁理屈を言い出すなんて思わなかったわ」

「？三十分ほど、平行線の言い合いが続いたのち。深夜は疲れた顔で言い捨てた。」

「私もお母様がこんなに頑固だなんて思いませんでしたわ！」

「？睨み合う私達。先に目を逸らしたのは、深夜の方だった。」

「だけど、深雪さんが感情的になるのも初めて見たわ。私は貴女が決してヒステリーなんて起こさないように……そう思ってた育ってきたの。でも、そんな上手くは行かないわよね。結局、人なんだから」

「？眉尻を下げて、困ったような顔をしている。私はどう返事すれば良いか、それが分からずにただ俯く。」

「？また、原作の記述を何となく思い出す。「感情的になり、魔法を暴走させないように」云々。けれど、何だかんだで彼女は頻繁に魔法を暴走させていた。これは、幼少期に思いなどを抑圧されていたことが要因だったのかもしれない。」

「達也に近づけ過ぎるのは、やめるべきなのかもしれないわ……。関心を完全に無くす、というのは無理なもの。——深雪さん、貴女には話しておくべきなのかもしれないわね。本当のことを」

？深夜は居住まいを直し、私と兄を巡る諸事情を話しはじめた。

？司波達也は、四葉の人々の世界を恨む心から生まれた化け物だということ。彼の持つ本当の魔法は、世界そのものを破壊してしまう力を秘めていること。彼の感情を暴走させない為、「司波深雪に関する事象」以外には激情を抱けないように精神構造を改造してしまったこと。

？また、司波深雪という少女は、実は四葉の最先端技術によって生み出された「完全調整体」であること。そして、深雪に付随する「コキュートス」は、司波達也を停止させるシステムとして、深夜の祈りによって生み出されたこと。

「……あの子は、貴女が死んでしまえばタガが外れ……この世の全てを破壊する。だからこそ、最初から感情を全部消しておけば良かった。どうして、あんなことしちゃったのかしら」

？深夜の表情は悔悟の念に満ちていた。予期せず手にしてしまった「人間兵器」のスイッチ。それをすっかり持て余してしまっているのだ。

？そんな中、私はといえば——

(——それ、原作知識だから知ってる)

？話半分で聞き流していた。要は、魔法科世界でよく出てくる「お兄様どうしよう問題」である。原作では深雪が達也のストッパーになるはずが、彼の一挙手一投足を褒めるものだから、結局なあなあになっていた。しかし、私は司波深雪でありながら、厳密では司波深雪ではない。私ならば、彼を止められる。

「……お母様。つまりは、私が彼を『止めて』しまえばよろしいのですか？」

？殺してしまえば、結婚しなくて済む。そう思い、私は身を乗り出して尋ねる。

「いいえ。実際『マテリアル・パースト質量爆散』自体は、四葉の為に使うならば有用だも

の。捨てるのは勿体ないわ。だから、貴女をそばに置いているの」
「そこに私がリソースを割くということは、結果的には私の力は弱まってしまおうのでしょうか？ それならば、やはり別の力を付けるべきですわ」

「貴女の望みは分かったわ」

深夜は首肯して——たつぷりと溜息をつきながらではあつたけれど——私の主張を受け入れた。

「では……」

「けれど、それは私が決めることじゃないの。真夜が決めることよ」

？真夜。深夜の双子の妹であり、現四葉家当主の四葉真夜だ。

？たまにしか会わないけれど、美味しいクッキーと紅茶をいつも用意してくれる優しい人。そして……「物語」の役割上、世界に降り注ぐ不幸を一身に受けた人。

「本家に行つてきなさい」

？冷めた紅茶を飲み干す深夜。飲まないうちに渋みが出てしまったのか、微かに顔を顰めていた。

「はい、お母様」

？私は成し遂げなければならない。

？司波達也よりも物語の中心に立ち、ストーリーを進めていくことを。「お兄様」を持ち上げるだけが、私の生き方ではないのだ。

第2話

?公表はされていないけれど、私は四葉直系の人間だ。つまり、真正銘のお嬢様。

?こんな夕方の中途半端な時間からでも、「本家まで連れて行って」と運転手呼びつければ、文句も言わずに連れて行ってくれる。ありがたいことだ。

「——ありがとう。今日はもう泊まって帰るから、待つていなくても大丈夫よ」

?運転してくれた使用人に声を掛け、私は車を降りる。

「こんな素朴な村が、死の魔法研究施設だとは誰も思わないわよね」

?村の中は安全なので、1人でてくてく進んでいく。集落の中でも一際大きな平屋の屋敷が、少しばかり見えてきたところで、私は足を止めなくてはならなかった。

「おや、深雪さんではないですか。貴女がお母様も伴わず、お一人とは。珍しいこともあるものだ」

「……あら、勝成さん」

?四葉分家の一つ、新発田家。その嫡男である勝成が、こちらに歩いてきたから。用事があつて、本家に来ていたのだろう。

「私が1人で来てはいけないかしら?」

?意識して顎を軽く上げ、めんどくさそうに私は答える。予想もしない切り返しだったのか、彼はいささかたじろいだ。元の「深雪」は、年上相手だからとお淑やかな対応をしていた。そのため、気の強いところを表に出すことは無かったのだ。

「いや、いけないことはないが。本家への用事に貴女1人で来なければならぬほど、深夜様のお加減がよろしくないのかと心配しただけだ」

「貴方に邪推されるようなこと、何も無いのだけれど」

?勝成は父から色々とプレッシャーを掛けられているのか、以前からこちらに攻撃的だった。私の姿を見つければ、絶対に突つかかってくるので、かなり面倒な存在だ。

「それで、何の御用でここに？」

「？しつこく聞いてくる勝成。問い詰めれば、私が口を滑らすだらうって舐めてかかっている。無視して立ち去ってもいいけれど……。」

「それじゃあ……私と戦って、貴方が勝ったら教えてあげますわ」

CADを片手に挑発する。このいけ好かない親戚をぶちのめしてやろうと思った。

「？そもそも、今日は叔母様に「訓練したい」とお願いしにきただけなのだ。別に揉め事を知られても困りはしない。

「ふん、それなら受けて立つ」

「そう」

「？私は答えつつ、CADに指を走らせる。発動したのは「ホワイトアウト」。領域内の温度を下げる魔法。冷凍倉庫くらいの寒さが一気に訪れ、勝成は反射的に身を縮こませた。

「？なんでこんな魔法を、と思うかもしれない。威力も絞っていて、寒いだけの効果しか示さないそれ。実は、領域干渉を兼ねているのだ。」

「？領域干渉はその場の状況に応じて、自分で範囲を決めた方が使いやすい。けれど、魔法力の高い魔法師が何も考えずに広げられるだけ広げれば、持続型魔法故に消耗してしまう。制御が必要だ。」

「？けれども、魔法というのは全体に作用させるのは比較的容易いが、部分的な作用は失敗しやすい。魔法師自身が、上手くイメージ出来ないからだ。」

「？」

「？では、未熟な魔法師はどうするか。答えは簡単で、平易な領域魔法を掛けるのだ。領域魔法も領域干渉も「魔法式をばら撒く」点は同じ。」

「？そして、そこから任意で移動させたり、広げたりすることで、相手の魔法を妨害する。自分で意識しやすいようにして、間接的に領域干渉を制御するのだ。これは基礎的なテクニックとして、魔法戦闘の教科書にも載っている内容だ。」

（私の方が干渉力は高いんだから！）

? 続いて、私は無系統魔法「幻衝」をお見舞いする。

? しかし、相手もやられっぱなしではない。「密度操作」で周囲の水分子を集め、加速魔法で自分の周囲に掛けられた低温領域を経由し、水礫をいくつも精製。それは勢いを殺さず、私に襲い掛かってくる。領域干渉は、範囲内の魔法を妨害するもの。つまり、その範囲外で行われた魔法は止められない。

(厄介過ぎる……!)

? 魔法を止めるために領域干渉を広げるか。しかし、領域魔法であるホワイトアウトを維持しつつ、礫を防ぐのはかなり難しい。しかたなく、防御障壁に切り替える。

「……!?!」

? 解除した途端、元の温度に戻った空気の塊が一気にこちらへ向かってくる。私に干渉力で劣る彼は、切り替わりのタイミングを狙っていたのだ。

? 作った防御障壁を回り込むように暴風が流れ込み、私は思わずたたらを踏む。こけそうになりながらも、振動系統の「サウンドウェーブ」をかなりの威力で叩き込んでやった。勝成が堪らず崩れ落ちるのを、目の端で確認。

「……………ふん! って、あつ!」

? 向こうも馬鹿ではないらしい。彼は地面に「摩擦力低下」を掛けていた。私がバランスを崩すことを見越して、トラップを用意していたのだ。無理にでも領域干渉を広げておけば……と唇を噛むけれど、後の祭り。まず今の私の実力では、あれこれ色々なことに気を回すリソースは無い。

(このままだと……絶対、頭打っちゃう!)

? 迫り来る痛みに備えて、ギョツと目を瞑る。けれども、頭蓋に響くような鋭い痛みはいつまで経っても来なかった。代わりに、誰かが私の体を支えている。背中を通して、誰かのひんやりとした手のひらの温度を感じた。

「え……」

? 体を立て直し、瞼を開く。振り向くと、そこには私と同年くら

いの男の子。

?ぼんやりと視線を彷徨わせるうち、目がぴたりと合った。彼の目つきには鋭さがありながらも、目の奥からはどこか温かみを感じさせる。

(司波達也……!)

「大丈夫ですか、お嬢様」

?今の私はお嬢様で、兄は使用人。それが、実際に事実として存在している。すこし可哀想だと思った。

「ええ、何ともないわ」

?つとめて平然とした態度で答える。

?そして、勝成の方に向き直った。彼は悔しそうな顔でヨロヨロと立ち上がる。

「……今日のところは、これで引き分けだ! 次は、俺が勝つ! 首洗って待ってる!」

?捨て台詞と共に、勝成は新発田の離れの方へ駆け出していく。

「おとといきやがれ、ですわっ!」

?彼の背中に、追い討ちをかけるよう叫ぶ。舌も出してやろうかと思っただけれど、私の中に残る淑女が止めた。

「……さあ、行きましようか」

?本家の屋敷の方へ体を向ける。ロスをしてしまったので早足で進むが、なぜか後ろから達也も付いてきている。

「何か、まだ用事があるのかしら?」

「失礼いたしました。お嬢様をご案内するのが今の私の仕事ゆえ、ご容赦を」

?丁寧に頭を下げる達也。その態度に、私は何だか背中がむず痒くなる。

「……普通に話せばいいじゃない。貴方は、私の兄なのだから」

「そうか。……意外とやんちゃな性格だったんだな。新発田家の長男に喧嘩をふっかけるとは」

「もつとボコボコにしてあげても良かったのだけれど。有耶無耶になっちゃったわ」

「領域干渉に拘らず、一撃で決めればよかった。あちらも優秀な魔法師だから、発動スピードは速いが……貴女ほどではない。単一の『サイレントウエーブ』なら、圧倒的な差で決められた筈だ」

「？こつそり、何処かから見ていたのか。戦術にケチをつけられ、私は少しむくれる。」

「魔法戦闘において、他の魔法が入り込む余地がないようにするのは定石だわ」

「無論そうだ。しかし、確実に一対一の戦いであるならば……スピードだけに拘っても良い」

「そうかもしれないわね。だけど、もし奏太さんなんか近くにおいて乱入してこようとしたら……どうだったかしら？」

「奏太というのは、勝成のガーディアンの名だ。彼より年下なので、今のところ護衛というよりは話し相手、遊び相手と言うべきかもしれないが。」

「そうだったら、俺が止めてやったさ。ガーディアンなのだから」
「当たり前のように、彼はそう言った。無論、これは正しいのだろう。でも、不満は不満だった。」

「……確かに、私は守られるだけのお姫様かもしれないわ」

「？血の濃さや潜在魔法力によつて、四葉家次期当主候補の中でも一番有力な私。ある意味で、次世代の家を盛り立てるお飾りでもあった。」

「でも……守るものがなくなった時。圧倒的に不利な状況の時。そんな場面でも、諦めずに道を開ける人でありたいのよ」

「？司波達也という「お兄様」がいない世界でも生きていけるように、とは言わなかった。」

「——これからは、私のことを『深雪』と呼んで頂戴。だって、貴方だけが、妹の我儘を叶えられる唯一の人間なのだから。じゃあね、『兄さま』！」

「？勢いよく駆け出し、達也を置いて勝手に進む。彼は追いかけて来なかった。」

「……仕方ない妹だね、深雪」

? そんな眩きは、既にどんどん先へ走って行ってしまった私の耳には入らなかった。



? 久々に会う真夜は今日も優しかった。道草を食ってしまったことを詫びると、「気にすることはない」と彼女は寛容に笑うのみ。勝成とのバトルは、既に知るところだったようだ。

? 話とは何か、と促され、私は思いの丈をポツポツと伝える。

「——貴女の考えは分かりました」

「では……」

「ええ、これからは四葉の戦闘訓練に参加させてあげるわ。今までは貴女の分の仕事を、達也さんに押し付けようかという方針でいたけれど。それでは確かに、分家の子供達の反発を招いてしまう」

? どちらにせよ、不平等ですものね。真夜は、そう言葉を重ねる。

「ありがとうござい……」でも、言っておくことがあります」

? 私がお礼を言おうとするが、途中で遮られてしまう。

? 何を言われるのだろうか。きよとんとして、私は真夜の顔を見つめる。彼女は、真剣な表情をしていた。

「そもそも……貴女が力を求める理由は、自分の兄がガーディアンである現状を何とかしたいからではないかしら?」

「え?」

「実戦に対する備えをしたい、というのだから。汚れ仕事を他人に任せて、自分だけは綺麗な手にいるというのが、納得できないのでしよう?」

? その通りだ、と首を縦に振る。私は主人公に依存した生き方をするだけのヒロインにはなりたくない。

「ええ。私は私で、きちんと四葉の任務に従事したいと思っていますの」

「……兄妹の繋がりというのは。外からの力で変えられるものではないのかもしれないわね……」

？おや？ 話が何処かズレているような……。

？単に、達也とセット扱いされる存在は嫌なだけなのだが。

「とはいえ、ガーディアンを外すのは無理よ」

「せめて、変更はできませんか？」

？いくら四葉家が人手不足とはいえ、直系である私のガーディアンを別に用意できないはずはない。「桜」シリーズから、誰か回して欲しいものだ。穂波から聞いた噂だが、「桜崎」の第一世代は空いているらしかつた。

「深雪さん。今の彼の立場はとても不安定なものよ。貴女のガーディアンであることで、やっと四葉の端くれとして認められている」

？なるほど。私はその辺りを詳しく認識している訳ではない。使用人序列などは、わざわざ教えてもらうことでもないからだ。

？追加する、という案もある気はするが、そういう訳にもいかないのだろう。それなりに達也の能力を知る者はともかく、そうでない者は「妹一人守れるだけの力もない」と断ずるに違いない。

「兄を想うなら、今は我慢なさい。——そうね、いつかは、貴女の願いが叶う日も来るんじゃないかしら」

？真夜はそう言つて、にこりと笑う。

？上手く丸め込まれた気もするが、「訓練の参加」はもぎ取れた。概ね、目的は達成したのではないか。



？深雪が去った後。真夜は一人、自室で考え込んでいた。

「姉様や、貢さん達の思惑は……まあ上手くいかないでしょうね。既に一番近い身内として、深雪さんは兄への興味を持ってしまっている」

想定外ではあったが、真夜にとつては都合の良いことでもあった。彼女の願う「復讐」を叶えるためには。

?元より、彼女の時間は12歳で止まっている。今の四葉真夜は、「世界への復讐」の為に生きながらえた死人に過ぎない。少なくとも、自身の認識ではそうだ。

?頭の中の知識から、無理に想像した怒りや悲しみ。それをできるだけ、自分の気持ちとして表したい。でも、今の真夜には不可能なことだった。それが苦しくて……許せない。

(皆が同じような理不尽を受けたら、私の気持ちを代弁してくれるだろうか。ならば、世界が灼けた時……ようやく私は同じになれる気がする)

「それには、あの子が必要なのよ……」

?司波達也を守らなくてはならない。そうでないと、真夜の心は満たされないから。

「ストッパーとして監視する必要性から、姉様達は深雪さんのガーディアンを達也さんのままにするしかない。きつと、できるだけ遠ざけるでしょうけど……」

?頭の中で巡る考えをまとめるように、口に出していく。

「何とか思い入れを持って欲しいものだわ。『止めて』しまわないように」

?今の真夜はそう願うことしかできない。精神に作用する魔法を使えない彼女は、「祈り」だけが頼みの綱であったのだ。

?

第3話

？四葉家の戦闘訓練は、異常なほどに過酷なものだが、覚悟を決めたからには教官役だって私に容赦はしない。

？小学1年生の後半にスタートしたそれは、4年半という長い期間をかけ、段階的に進んでいった。

？まず叩き込まれたのは、意図的に魔法暴走を止める訓練。感情ではなく、テクニク——想子操作によって制御するのだ。その為に延々と圧縮想子弾を作らされた。体から限界まで想子を絞り出すことにより、身体に魔法力を失う危機を感じさせる。それにより、無意識下で無駄な想子を出さないよう徹底的に覚え込ませるのだ。

？これが出来ない、市街地でセンサーに引掛からずに魔法を使用できない。無駄な想子を出してしまうと、魔法師の存在をセンサーが感知してしまう。

？外に余剰想子を漏らさずに魔法発動することは、四葉の戦闘魔法師では必須のスキルなのだった。

？他にも、CADを使えない状況で、出来るだけ事前動作を相手に悟らせずに魔法を発動する訓練。非常に高度なイメージ力が求められる。また、最悪の場合に自爆戦術を取れるよう、魔法発動の心理的なセーブを外す訓練。対魔法師用フルパワーライフルの銃弾を跳ね返す対物障壁を構築する訓練……。

？他にも、魔法非依存の訓練も多く課された。数々の苦難を、我ながらよく耐えたと思う。安易に「参加する」と言ってしまった自分を呪いたくなった。

「——ようやく、最終段階まで来たわね」

？四葉の所有する小型家用機の中で、私は外の景色を眺めていた。眼下に見える島は、巳焼島。凶悪魔法犯罪者を収容する刑務所を備える島で、四葉家の訓練にも使用されている。

？ここで、私は「収容者を処刑」するミッションを遂行する。殺人への忌避感を完全に払拭させると同時に、「本番」の魔法戦闘を体験するのだ。

「けど……どうして貴方も一緒なのかしら。兄さま？」

？横目でキツと睨みつける。これだけは納得いかなかった。

？何故か、巳焼島へは達也も同行することになっていたのだ。私の訓練だというのに。

「俺はお前のガーディアンなのだから、危険な場所へは着いていくさ」

「兄さまは既に島に行ったことがあるのでしよう？」

「ああ、2回な」

それならば、もう訓練課程は終了している筈。本当に私の為に同行しているのだ。

「……とにかく、邪魔はしないで頂戴」

「深雪の身に危機が及ばない限りは、な」

？どこか噛み合わない。敵と戦うことは、安全では決してないのだから。殺すか、殺されるか……。

？その認識は、達也にもあるに違いない。ならば、結局は私の邪魔をするということ。溜息をつきたくなった。

「——ところで、CADを変えたのか？」

？達也がそう尋ねてきた。私の手首に巻かれている、武骨な銀色の腕輪型CADを見てのことだろう。

「ええ。端末型は好きだったんだけど、殴ったりする時に不便なものだから……」

？手が空いていた方が良いと思い、変えることにしたのだ。ベースこそFLITの基本ラインではあるが、軍や警察に卸している特殊タイプだ。非常に軽い上、少々乱暴に扱っても壊れない。そして、テンキーに凹凸が付いているので、覚えれば見なくてもコードを打てる。なかなか優れものだ。

「殴らなくていいだろう。深雪の魔法特性的には、大規模魔法での制圧が一番向いている」

「私が優先して警戒しなくてはならないのは、コミュニティ内の裏切り者よ。そんな時、魔法よりも手が早いこともあるわ」

？例えば、悪意ある者が私の信頼する誰かを洗脳していたら？ 使用人が背信行為をしたら？ クラスメイトが私を殺す使命を帯びて

いたら？

？とはいえ、私の身とかはどうでもよいのだ。死ぬとしてもそれは仕方ない。けれども、私の死は「世界の終わり」でもある。これは、世界の危機を私が背負っているという責任感だ。

「……俺が裏切ることも考えているのか？」

「いいえ。兄さまが私を裏切ることなんかないわ。絶対よ」

それだけは、即答できた。ずっと？ずっと昔から、私はよく知っている——「司波達也」は、「妹を守る」という生き方を運命づけられている少年なのだ。

彼が裏切るというのなら、それは物語の崩壊を意味する。

「……そうか」

？話しているうちに、飛行機は巳焼島に着陸。ここを管理する所長に挨拶をしたあと、下士官の案内で宿舍へと移動する。このままずっとスーツケースを転がす訳にもいかないからだ。

「——まさか、同じ部屋だなんて」

？驚くべきことに、私と達也の部屋は別々でなかった。重要人物用に用意されている部屋のように、そこそこ広いのだけが救いか。寝室も別になっている。

「じゃんけんしましょうか」

？案内人が去ったあと。私は拳を握りしめ、達也に向き直る。

「どういうことだ？」

「ベッドにどちらが寝るか決めるのよ」

「深雪が寝ればいいだろう」

「ちゃんと決めたいの。……勝ったらベッドよ！」

？仕方なさそうな顔をしながらも、達也が手を出した。私は喜色満面の笑みを浮かべ、ポーズを構える。結果は……私がチョキで、達也がパー。

「俺はソファで寝るから。深雪はちゃんとベッドで寝るんだよ。ベッドルームには立ち入らないようにする」

「……わざと負けたでしょう」

「ああ。この後何回やっても、俺は深雪に負け続けるだろうさ」

「?」さらりと彼はそう答える。私は「ふんっ!」と鼻を鳴らすことしか出来なかった。



「?」島には二つの火山があり、それらは位置で単純に「西岳」、「東岳」と名付けられている。刑務所は西岳西側に位置し、私はここで脱走者が出るまで待機せねばならない。

「……そう都合よく逃げ出すのが出てくるものかしら」

「監視の人間が切り替わる、とわざと噂を流しているんだろう。罠だと思ふ可能性もあるが……逃げ場のない島だからな。囚人達も、万に一つの可能性に賭けるしかない」

「?」することもないので、刑務所近くの待機所で暇を潰していた。普段は警備係の軍人が数人詰めているようだが、今日は代わりに私達が入っている。

「?」CADをサスペンドモードにしているとはいえ、のんびりとした空気感だ。天気もいいし、日光浴みたいなものである。

「……来た」

「?」思ったよりも早く、脱走者が現れた。人影は3人。何らかの方法を使い、囚人同士でコンタクトを取っていたのか。

「?」CADを操作しつつ、わたしは現場に急行する。視認できる距離まで行かないと、有効な魔法を放つことができないからだ。とりあえず、「領域干渉」を広げられるだけ広げて無作為に魔法を阻害する。敵は強力な魔法師であり、CAD無しでも危険な可能性が高い。

「!?!」

「?」案の定、魔法が使えなくても突破するつもりらしい。

「?」戦おうと足を前に踏み出した時、何かをそれを阻んだ。達也の背中が、私の目の前にあった。

「ちよつとー」

? 文句を言おうとする間にも、達也は敵を排除しようとしている。3対1、体格の差。かなり不利な状況でも、彼は上手く立ち回り戦っている。けれども、私は領域干渉を維持しているだけ。これが重要なのは分かっているけれど……。

(何かやらなくちゃ!)

? 私は目を凝らし、CADを操作する。達也には被らないよう、注意深く作用範囲を調整し……広域減速魔法「ニブルヘイム」を発動した。領域内の物質を比熱、フェーズに関わらずに均等冷却し、極小氷粒、ドライアイス粒子、液体窒素の霧を含む大規模冷却塊を作り出す魔法である。

? 氷の国と名付けられた通り、それは凄まじい冷気を生み出し、囚人達は一瞬で凍りつき死んだ。

(あつ、マズい)

? ニブルヘイムは、一定の領域の温度を急激に低下させる。それによって、冷気に向かって勢いよく風が吹き込んでしまう。地面が抉られ、尖った砂利混じりの黒い渦が巻き起こる。

? 範囲近くにいた達也が突風に巻き込まれ、吸い込まれていく。踏ん張りはしたようだが、小学生の体格では流石に厳しい。

「兄さまー!」

? けれども、達也は何とか自己加速術式でそこから抜け出した。彼の人工魔法演算領域ではCADがあったとしても、ここまでのスピードでは発動できない。フラッシュ・キャストを使ったのだろう。

? 私は達也が抜け出したのを確認し、自分達に防壁を掛けた。もちろん、「ニブルヘイム」も解除する。私達は半円ドームの中で、渦が収まっていくのを眺めた。

「……やれやれ!」

「あつ! 兄さま、怪我を!」

? 我にかえり、達也を見る。彼の顔は傷だらけで、ところどころ血が流れていた。スピード重視で加速術式を発動したのだろう。腕が折れており、だらんと垂れ下がっている。この様子では、内臓へのダメージもありそうだ。

「これくらい、何ともないさ」

「でも……」

？私がそう言った時。ほんの一瞬だけ、想子光が瞬いた。光が消えた時には、ボロボロだったはずの達也はすっかり元通りに。

？彼固有の二つの魔法。その一つである「再成」の効果だ。エイドスの変更履歴を最大で24時間遡ることで、損傷を受ける前のエイドスをコピー、それを魔法式として現在のエイドスを上書きする。見た目としては「巻き戻った」ような効果を現す。

「あ……」

「お前に怪我がなくてよかった」

「……ごめんなさい」

？達也に向かつて、私は頭を下げた。悪いのは私だ。味方と敵が混在している状況で、大規模魔法を使うなんて無茶をしたから。自分の力に驕って、兄を傷つけてしまった。

「いいんだよ」

？頭をぽんぽんと撫でられる。見れば、達也は優しく微笑んでいた。

「お前を守りたい。誰であつても、お前を傷つけるなんて許さない……俺にはその思いしかないし、これだけは譲ることはできない。――だが、それはお前の気持ちを無視することでもあるんだな」

「ごめんなさい、兄さま」

「もう謝ることはない。これからもその戦術を取ればいいんだ」

「え？」

？言っている意味が分からず、私は首を傾げた。

「俺に当たるかもしれないなんてことは気にせず、敵に魔法を放てばいい。敵も味方も黙らせてしまえる、力任せの大規模魔法がお前の特徴だ。それを磨けばいいんだよ」

？達也はそう言いながら、私の手を両手で包み込む。ひんやりとしていて、手のひらの皮膚は硬い。苦勞をしている手だった。

「何があつても、俺は決して斃れることはない。だからね、深雪……ガーディアンとして、お前の側で守り続けるよ」

?なんて悲しい自己犠牲だろう。『妹を守る』という生き方を運命づけられている少年」とは、あまりに残酷なさだめだ。

?いつか、解放してあげられるだろうか。私とは違った未来を、歩ませてあげられるだろうか。

「ありがとう。……『お兄様』!」

?せり上がってくる様々な感情を押し殺し、微笑みを返した。

「……なんだ、その呼び方は?」

「勘違いしないでよ? ちよつとだけ……ほんのちよつとだけ、見直しただけなんだから!」

?道を違えることを望むのもまた、確かな兄妹愛と信じる。

?嫌いなわけじゃない。憎いわけでもない。でも、一緒にいない方がきつと幸せ。歪なまま、残った感情を本当の愛だと思ってしまうたら……達也にとつても不幸だ。

(失った感情を取り戻すことはできないけれど……私を經由して、大切なものを見つけれたら)

「戻りましょうか、お兄様?」

?今日初めて、「お兄様」と口に出して兄を呼んだのに。驚くほど、その呼び方がしっくりくる。どうしてだろう。その答えは分からなかった。

第4話

？中学生になった私は、四葉の仕事を受けることも格段に増えた。そんな時は、達也も一緒についてくる。前までの私はそれを煩わしく思っただろうけど、今は嫌だとは思わない。自分の実力を存分に発揮するために、身の危険をきちんと守る。その為にガーディアンがいるのだ、と理解したから。

「——思い切り『ニブルヘイム』を使えばよかったのに。『凍火』で銃火器を全て黙らせてくれたのは助かったが……」

？今回の任務は、さる筋からの依頼であった。儀式魔法系のカルト集団を壊滅させ、資料や道具などを回収せよというもの。どうやら、その儀式魔法が神道系で、何者かがスポンサーの機密を持ち出したらしい。

「冷却魔法をかけて、敵を動けなくしたりはしましたわよ？」

「俺に気を遣わなくていいんだぞ？」

「もしお兄様と組むのでなければ、相克を気にしなけばいけませんもの。これも練習なのよ」

？魔法は他人同士で重ねて発動できない。それぞれの干渉力で、拮抗してしまうからだ。相克を防ぐ為には、作用範囲を上手く調整しないとイケない。魔法師というのは、意外に「空気を読む」というスキルが要求されるのだ。

「そうか」

「ええ。……ところで、沖縄の話は聞いている？」

「母上と行くのだったか。俺も護衛として参加する」

？着いてくるらしい。まあ、穂波さんもいるし。お母様にくっついてたら、彼をそれなりに自由行動させられるだろう。

「お母様の手前、粗雑に扱うわよ。ね、お・兄・様♡」

「ああ。けど、普段から別に『ちよつと』とかでもいいんだぞ？ 呼び方を無理しなくても」

「嫌ね、私は好きでやってるのよ」

「ならいいんだが。——黒羽殿とも現地で合流するのだったか」

「そうよ。文弥くんと亜夜子ちゃん、貴方に会いたがってるわ」

? 黒羽の双子とは、訓練課程で一緒になることが多かった。

? 特に亜夜子とは同性なのもあり、何度も一緒に辛い訓練を乗り越えた。最初はいがみ合いとはいかないまでも、互いに対抗心を燃やしていたのだが、そのうちライバル兼友達の立ち位置に落ち着いた。今は、休日に食事や買い物に行く仲だ。その度に彼女が達也の話を聞きたがるので、適当に「敵軍を一瞬で塵に変えた」だの「敵国の大型戦艦を撃沈させた」だのエピソードを捏造している。まあ本当になるし良いだろう。

「大した人間でもないのだがな……俺は」

? しれっとした顔でそんな言葉を吐く達也。「原作」ならば、私はそこで叱咤したのかもしれないが、ここでは無言のまま通した。

? 素晴らしい人間になってならなくていいのだ。ただ、普通の男の子になってくれたらいい。



? 沖縄に行くということは、トラブルに巻き込まれると言うことだ。大亜連合が、沖縄に侵攻してくる。そういうことになっていた。だから、私は行くかどうか本当に最後まで迷った——しかし、やらねばならない。

? そのXデーは、すぐやってきた。2092年8月11日。

? 現地で黒羽家の皆と合流していたから、その時の私は、亜夜子、文弥……そして達也と共に朝食を食べていた。もちろん達也の同席について、深夜と貢はいい顔をしなかつたけれど、双子達がゴネにゴネた為に許してもらえたのだ。

「警報!」

? テレビから。情報端末から。様々な場所からけたたましい警音が。不気味でイヤな音だ。

「何が起きていますの！」

「昨日までは何もなかったのに……」

？穏やかな時間は急変。他の場所でもそうなのか、どこかザワザワした空気を感ずる。分かっているけど、やはり不安はある。亜夜子の手を握り、意味もなく周囲を見回す。

「文弥、亜夜子！ 深雪ちゃん！」

？そこに、勢いよく貢が駆け込んできた。バカンス中だからか、いつものソフト帽の代わりにカンカン帽だった。こういう変なユーモアはあるのだが。

？そして、達也のことは完璧に無視。清々しいおっさんだ。

「不安かもしれないがね、心配はいらないよ。真夜さんに連絡して手を回して貰ってもいるし、うちの連中がいるから安心だ」

？それにお前達も実力をつけているからね、いざという時の心構えだってあるだろう？と、貢は言う。わりと、茶目っ気も持ち合わせているのだ。達也のことは無視するけど。

「文弥、亜夜子。お前達は黒川について行って、先に脱出しなさい」

？黒川というのは、黒羽家で抱えている部下の一人だ。

？貢の言葉に彼女らは頷き、私達に「気をつけて」と言い残して出て行った。

「達也くん。君は桜井くんのところに行って、対応を聞いてきてくれ。もしかしたら、あちらに真夜さんが連絡しているかもしれない」

「貴方の御命令を聞く必要はありますか？ 自分の主人は「いいから行ってきて頂戴」

？私は口を挟んだ。ここで揉めていても仕方ない。

「かしこまりました、お嬢様」

？彼は部屋を出て行った。誰彼構わず敵を作ろうとする無鉄砲さを何とかしてほしいところだ。

「貢叔父様、兄がごめんなさいね」

「いやいや。君から言ってくれて助かったよ」

？遠くから爆発音が聞こえる。そこそこ荒事には慣れているけれど、やはり普段とは違う何かを感じた。

? しばらくすると、達也がこちらへ戻ってきた。

「国防陸軍の風間大尉のご好意で、シエルターを用意していただけるようです」

? 来た。私がお母様達と琉球舞踊の観覧をしている間に、達也は軍の見学をしていた。きつと彼らは「見抜いた」に違いない。四葉までは辿り着かずとも、何かの素質を。

「なるほど。先程、真夜さんが『手を回す』と言っていたのはこういうことか」

? 納得したように頷く。推測するに、どうやら真夜が軍部に圧力をかけてもいたらしい。

「とはいえ、深雪ちゃんはどうする?」

「私は母と一緒にいきますわ。心配ですもの」

? 深夜が心配なのは本当だ。娘にすら心の内を見せない母親だけれども、見殺しにしたら寝覚めが悪いなと思うくらいの存在ではあった。

? すぐ深夜達と合流し、軍の迎えで基地まで向かうことができた。ただ、私達だけではなく、軍需産業の重役家族も一緒だ。同じく、コネで割り込ませてもらったのだろう。

? シエルターを開けるまで時間がかかると、少し待たされることとなった。できるだけ早くして欲しいものね、と深夜が呟く。

「なんとなく嫌な感じがするもの。魔法的な何かではないけれど」

? 精神干渉魔法に優れた魔法師は、勘が鋭い傾向にあると言われている。違和感を覚えることで他者の術式を破り、勘によって精神の特定領域に干渉する術者が、精神系を扱う魔法師の特徴だ。それゆえに、「虫の知らせ」を受け取る力を発達させているのだろう。

「——君達、魔法師かね?」

? 静かな場所なので、小さな声で話していても響く。

? スーツ姿の男——居合わせた家族の父親だ——が、ハンカチで汗を拭き拭き問うてきた。

「それでしたら何か」

「ちよつと外の様子を見てきてくれないか! その腕輪がある分、

我々よりも安全だろう！」

？偉そうに命令してくる男。お願いをするにしても、もう少し言いたい方というものがあると思う。

「うるさいわね」

？私は一步踏み出し、男を睨みつける。まさか言い返してくると思わなかったのか、彼は少し怯んだ。

「深雪さん、やめなさい。みっともないわ——達也。貴方、一度外に出て様子を見てきて頂戴」

？深夜に反論するかと思っただが、達也は私にアイコンタクトをしたのち、外に出て行った。ここで私が喧嘩を始めるよりは、平和に収めた方が良いと判断したのだ。今のアイコンタクトは、部屋の外でしばらく待つて、ほとぼりが冷めたら室内に戻ってくるという合図だ。お母様の命令に対して、適当にサボることはよくあった。

「失礼しますー！」

？達也と入れ替わりくらいのタイミングで、4名の軍人が現れた。案内に来たのだろうけど、どこかソワソワしている。軍人特有の堅苦しい言動だからこそ、見えてくる綻びだ。わたしは目を凝らして、違和感の正体を確かめる。

(あれは、アンティナイト！)

？魔法師でなくても、魔法発動を阻害できるマジックアイテム。高価なそれは、一兵卒が手にできるものではない。不自然だ。

？アンティナイトが目に入った瞬間、私は躊躇わずに軍人の一人に蹴りを入れる。魔法を使わなかったのは、事前動作でバレると思ったからだ。

「深雪様!？」

「障壁ー！」

？穂波の慌てた声に、一言のみ返す。深夜を守ることを刷り込まれた彼女なら、これだけで障壁魔法を出してくれる筈だ。

？すぐ、私も「ニブルヘイム」を発動。敵の動きを止めるにはこの魔法が一番早い。

「凍てつきなさいー！」

「…ッ！ 死ねええええ!!!」

しかし、敵の動きも早かった。私の「ニブルヘイム」が、温度上昇の情報すら凍てつかせるよりも早く、武器——対魔法師用ハイパワーライフルを乱射する。狙いが定まらないせいで、めちやくちやに銃弾が舞う。その射線には、私も入っていた。静かに目を瞑る。でも、諦めた訳ではなかった。

(…だって、大丈夫なもの)

? 金属の粉が、ぱさりと少しだけかかった。奇跡のような状況は、必然的に作り出されたものだ。

? 目を開けると、凍りついた4人の軍人がバタバタと地面に倒れるところだった。その背後から現れたのは……達也。手のひらをこちらに向け、静かに立っている。

「お兄様!」

「……深雪、無事か?」

「ええ。ありがとう」

? 私は達也に駆け寄った。来てくれると信じていたが、やはりホツとする部分はある。そうでないと、私の身体は蜂の巣のようになっていた。

「礼には及ばないさ。お前を守るのが、俺の使命なんだから」

? 分かっているのだ。今だって、私は達也の唯一持つ「感情」ありきで計算をした。自分の命が大事だから。けれど、彼の人間らしさは、そこからしか生まれえない。私を守ることが、「司波達也」の人間性を引き出す方法……。仕方なかった、のだ。

? それなのに、涙が出るのはなぜだろうか。



身内の軍人が——まあ、我々のことだ——を殺人未遂するという事態が起きてしまった。そんな不祥事の詫びという形で、私達は上位幹

部用のシエルターに案内してもらおうこととなった。

？壁一面に備え付けられたモニター全てが、外の様子を映し出している。映画のような情景だけれど、全て現実のもの。それをぼんやり眺めていた深夜が、急に私の方に顔を向けた。

「——深雪さん。貴女が言いつけを破って、『あれ』にあんな気安い態度を取っているとは思わなかったわ」

？ここに達也はいない。彼は戦場に往ってしまった。数十台もあるモニターのどれか、その向こう側に兄はいる。

「使い方を理解しただけですわ」

？私は静かに答えた。現に、「司波達也」を都合よく利用している。

？6歳で止まってしまった達也の感情。ある意味で純真なそれを弄び、上手く手のひらで転がしているだけ。

「使い方？」

「お母様は分かっています？ あの人は、兄は……全ての感情を失った訳ではないのよ」

？そうなのだ。達也の感情は、全部なくなった訳ではない。「強い情動」を消されたのみで、薄くとも喜怒哀楽は残っている。

「だからどうだっていう……」「幻肢覚」

？幻肢覚。手や足を失ったり、神経の損傷で感覚がなくなっても、手や足が未だあるように感じられること。これは身体の話だけれど、精神だって形があるのだから、まるで荒唐無稽な話という訳ではない。

「研究所の者に話を聞いたところ、彼は感情を失ったことを感覚的に理解できているそうです。だから、今自分が閾値を超えたストレスを受けているということを、脳が理解していかないわけがないと」

？ならば、脳は「ストレスを受けた」と認識して、それをきちんと処理する。本当の意味で、精神的ダメージを受けない訳ではないのだ。脳内の伝達物質だけは、正常に作動している。

「私がそれに気づいたのは、亜夜子ちゃんに『あること』を教えるもらった時です」

？亜夜子は、達也に「極致拡散」のイメージを教えて貰ったと語っ

た。本当に私以外に感情が無いのなら、そんなことをするだろうか。ストレスから逃れるべく、打算含みとはいえ自発的な行動をしているのだ。実際に「原作」でも四葉家内に理解者が欲しかった、少年らしい功名心がない訳では無かった、と達也の心情は語られている。

「彼が完全な心無き人形であれば、雑な扱いをすればいいでしょう。でも、そうではありません。——刷り込まれた行動原理に対して、感謝の気持ちを示してあげることが、暴走を防ぐ方法だと思いますわ」

？世界を滅ぼす魔法。それは達也の匙加減ひとつで決まるもの。だからこそ、人々は恐れた。臭いものには蓋を——彼をいないものとして扱う。そんな迷信じみたことで、恐怖から逃れようとした。それではいけないのだ。貴方は人間なのだ、と肯定してやらねばならない。

？そう述べた私を前にして、深夜はたつぷり3分は黙っていたらうか。

「……………好きにしなさい」

？結局、そう言い残して……。深夜は私の横を擦り抜け、部屋の端に移動した。彼女は適当なパイプ椅子に腰掛け、目を瞑ったつきり何も言わない。

(何がなんでも、私の行動を改めさせなかったということとは……………)

？頭に浮かんだ考え。あり得ないそれだけど、そうだったらいなと思った。

第5話

？魔法科高校の入学試験は、大きく分けて3つに分けられる。魔法実技、魔法理論、一般教養。配分傾斜は、だいたい7：2：1くらいだろうか。脳筋が受かる学校である。例年、一科生の平均は6割くらい、二科生の平均は6割を少し切るほどか。そして、実技成績では足切りが存在し、半分は取れないと合格できない。

「ハア〜!? やっぱり、私が総代なんておかしいわ！ お母様に怒られてしまったじゃないのよ！ ああ……最悪だわ」

？学校に向かう為に乗ったキャビネット内で、私は達也に不満をぶちまける。ちなみに、彼が二科生であることには少しも文句はない。人工魔法演算領域のスペックでは、その程度なのは理解していた。

「誰が忖度をするんだ。まあ、お前がそんなに言うからな……藤林さんに、一高の入試データを探してもらった」

？藤林さんというのは、国防陸軍の軍人である。彼女はハッキングが得意なのである。

沖縄の一件で四葉家——正確には達也だが——は、国防陸軍内の実験部隊「独立魔装大隊」と急速に接近することとなったのだ。彼らは組織が作られた経緯上、十師族とは関わらないスタンスを取っていた。

？けれども、ナンバーズの傍系や、訳あって一員として認められていない者は、積極的に登用していた。達也もその括りで採ってもらえたのである。もちろん、「あの魔法」も理由にはあるが。

「何もおかしいところは無かったぞ？ 正真正銘、お前が一番だよ。深雪」

「変ね……合格者平均に収まるように、調整したのに」

「まさかと思うが……深雪、点数を筆記で調節してないか？」

？その問いかけに、私は頷く。実技を8割ほど、筆記を半分よりちよつと下で抑えた。

「そうよ？ 実技もちよつと手は抜いたけれど……。あんまり手を抜くと、一気に削れてしまうもの。筆記は書かなければ良いから」

「二高の入試総合成績は、実技成績をベースに『総合的』に評価し、点数をつけたものだぞ？ 入試の点数はまた別だ。そうじゃないと、俺すら一科生になる可能性がある」

「まあ。考えてるのね、学校側も……」

？道理で、入試成績は原則非公開な訳だ。そう納得していると、達也は私の肩に両手を置く。じつと私の目を見つめ、彼は言った。

「一生に一度の高校生活だ。総代になれたことを誇らしく思って欲しい。そして、俺にお前の晴れ姿を見せてくれ」

「……仕方ないわね。私の挨拶、しっかり目に焼き付けなさい！」

？達也の言葉に納得できた訳ではない。というより、迂闊な自分を責めたい気持ちは……これからもずっとある。

？それでも、兄の願いを聞いてあげたかった。彼の前では、可愛い妹でいたかった。

「そうさせてもらうよ」



？深雪についてきたものの、式が始まるまではまだまだ時間があ
る。

？しばらくうろついたのち、達也は手頃な校内のベンチで書籍データを
読むことにした。書籍といっても、魔法系の論文なのはご愛嬌。こ
れはFLT開発第3課の研究員が書いたもので、できるだけ早く査
読しなければならなかったからだ。

「司波くん、よね？」

？急に声をかけられた。顔を上げると、そこには一人の小柄な少
女。豊かな黒髪をリボンで纏めたヘアスタイルの可愛らしい少女だ
が、達也は彼女の正体を「データ上」でよく知っていた。

「エルフィン・スナイパー……」

「そのあだ名は好きじゃないわ。——私は七草真由美。この第一高校
の生徒会長よ」

？十師族「七草家」の長女、七草真由美。長距離狙撃魔法の名手として、若年ながらも界限では名の知れた天才。異名は「エルフィン・スナイパー」。妖精のようにキュートな彼女のビジュアルを讃えた故らしいのだが、どうやら本人はお気に召していないらしい。

？なるほど、手首には薄型の腕輪型CADが巻かれている。ここ第一高校の校則では、生徒会・風紀委員などの役職を持った者しかCADを携行できなかったはず。十師族直系ならば、校内でそれなりの地位についているのは不思議なことでもない。達也はそう納得した。

「それで。生徒会長ともあろうお方が、なぜ俺のような者に？ ご覧の通り……刺繍はありませんよ」

？達也は肩をすくめ、胸ポケットを指さした。本来あるはずの校章である八枚花弁の刺繍がない。「紋無し」……これは、二科生の象徴でもあった。

「その刺繍は……いえ、今言うことではないわね——でも、貴方はもう既に一部では有名人よ。だって、ペーパーテストで前代未聞の高得点を叩き出した子だもの。7教科平均96点、中でも魔法理論と魔法工学は小論文含めて満点……一科生でも、このレベルには達していない」

「ペーパーテストだけの話で「そう。ペーパーテストだけなの」

？達也の謙遜を、真由美は食い気味に遮った。

「実技点が足切りギリギリだというのに、理論は素晴らしい成績……本来、魔法実技と魔法理論には強い相関関係が見られるというのに」「実技は苦手ですが、理論は得意なんです」

「もう1人、実技と理論の点数があつてない子がいたわ」

？弁明を聞くことなく、彼女は話を続けた。しかし、真剣そうな語り口の割には表情が面白がっているそれだ。——彼女はどのような立場なのか。達也は警戒を強める。

「……司波深雪。貴方の妹さんよ」

「まさか、俺と深雪が答案を交換したとでも？」

「教員の間では、そう考えてる人もいるわ。まあ、結果的に貴方の入学許可は下りただけだね」

だって、？証拠が無いんですもの。真由美は自分の頬に手を当てて、そう嘯いたのだった。

「だから、私がお節介を焼きにきたの。入学早々、いきなり謂れのない中傷に遭うのは嫌でしょう？」

「現在進行形で受けている気はしますが」

「あら、酷いわ……」

？真由美は、わざとらしく頬を膨らませた。チャーミングな表情。だが、その可愛らしい彼女の姿を見ても、達也の脳裏には「小悪魔」というワードがチラつくのみ。

？この人には今後も振り回される気がする……そんな嫌な予感が出て、彼はため息をつきたくなった。

「そろそろ、講堂も開放される頃ね。またね、達也くん。これからも仲良くしましょうね？」

？知らぬ間に「達也くん」呼びになっている。彼はハアだがウムだかとにかく曖昧な返事で、真由美の言葉を乗り切った。

？歯切れの悪い返事だったが、彼女は特に咎めることなく、明るく手を振りつつ去っていった。

(深雪に火の粉が降りかからないといいが……)

？妹を守る為に高校まで付いてきたというのに、これでは本末転倒である。

？最悪の場合は退学して、常時「精霊の眼」で気を配っておくという選択肢にせざるを得ないかもしれない……達也は考えを巡らせながら、付けっ放しだった端末の電源を落とした。



？入学式の答辞は、そこそこ「魔法師」らしい内容を適当に言っておいた。要は、魔法という才能によってここに集った200名であるとか、生まれ持った力を伸ばして世の中に還元していきたいとか……そんなものである。特に講堂内の前半分、つまり一科生は、私の演説に拍手喝采であった。ここから3年間に向けた掴みはバツチリと言

えよう。

? わざわざクラスに顔を出す気にもなれないので、達也と合流しようかと歩き始めた時、声をかけられた。

「おつかれさま、司波さん。この後に時間はあるかしら?」

私に声をかけてきたのは、現生徒会長——七草真由美だった。そういえば、彼女は達也と会ったのだろうか。ふと抱いた疑問だが、真由美は偶然にもその答えを告げた。

「良かったら、達也くんも呼べないかしら? さつきは少ししか話せなかったから」

「それは構いませんが……七草先輩、既に兄とお話をされたのですか?」

? 端末でメッセージを送りつつ、私は真由美に尋ねる。やはり、ペーパーテストの成績で興味を持ったのだろうか。

「ええ。面白い子よね」

「そうですか?」

? もちろん、私としては面白いと思っているが。感情にリミッターが掛かっている割に、そこそこ達也は人間味があるのだ。しかし、分かりやすい訳でもない。日頃から、生活を共にしてるからこそ分かることだ。

? 真由美が、達也のことを「面白い」と表現したのは、意外なことでもあった。

「照れ屋さんというのかしら……あまり、人と関わるのが得意じゃない感じ。可愛くて新鮮だわ、弟みたいで」

? 私の家、きょうだいは多いけれど……弟はいないのよね。真由美はそう続けた。

「……あまり兄で遊ばないでくださいね」

「いやねえ、そんなことしないわよ。ふふふ」

? その笑顔を見るに、まったく信用ならない。

? 掴みどころのない先輩と話しつつ、生徒会室へと向かう。達也にもメッセージを送ったから、じきにやってくるだろう。

「——待たせたな、深雪」

? しばらくして、達也が姿を現した。悠々とした足取りだ。雰囲気だけはあつた。二科生なのに。

「達也くん! さつきぶりね」

「……七草会長」

「なーんか距離があるわねえ。気安く『真由美さん』とかでもいいのよ?」

「いえ、結構です」

? ウザ絡みをされて困っている達也。いや、困っているというよりは、面倒に感じているのか。

「——あんまり、調子に乗るなよ。一年生」

? 急に硬い声が出た。声の主は、上級生らしき男子生徒であった。たしか、彼は副会長だ。式の際に自己紹介をしていた気がする。

「ちよつと、はんぞーくん……」

? そうだ、この男は服部刑部少丞範蔵。模擬戦で達也にボコボコにされる未来が待っている。

「会長も会長です。入学式直後というのに、ウイードに気安く声を掛けていては……新入生に舐められてしまいます」

「そんなこと……では、そういう『舐めた』新入生だけに注意をした方が効果的ではありませんか。新入生達の目の前で、会長の印象を下げかねないことを言ったら意味がない」

? 真由美の反論よりも早く、達也が切り込んだ。私は「面白くなってきた」と内心ワクワクする。誰譲りでもない無鉄砲で、敵を作りまくるのが司波達也だ。とはいえ、そこに正義感はなくなくて、ただ「正論」を言っているだけ。

? 私に關してのこと以外は、情より道理が先行してしまう。あまりにも共感能力が薄いのだ。

「……つ、! それは……」

? ぐつ、と詰まる服部。まさか、反撃されるとは思ってもいなかったのだらう。少し脅せば、ビビって黙る。そんなふうを考えていたのかもかもしれない。

「少なくとも、最優先で諫言すべきことではない。一高の校則を考え

るに、会長の態度は正しいものではあるのですから」

「？まあ実態は違うのでしようが、と達也はぼそりと呟く。

「——ほ、ほら！ 2人とも落ち着いて！」

「？我に返った真由美が、あわてて間に入った。

「ね？ 深雪さんも何とか言っただけで！」

「ええ。服部先輩、申し訳ありません。——兄はルールを気にしがちで。何しろ、規則の穴を突くのが大好きなものですから……。ルールがルールとして機能していないと、それができなくなってしまうでしょう？」

「……は、はあ？」

「？あんまり良い趣味ではないわね……。と真由美が小さな声で言うのが聞こえた。

「でも、世の中には書かれていない暗黙のルールってものがありますものね……。それで提案があるのですが」

「提案？」

「兄が折れるとは思えませんし……。ここは、模擬戦で決着を付けるというのはいかがでしょうか？」

「深雪!？」

「なっ……。！ 司波さん、貴女は自分が何を言っているのか分かってるんですか？」

「？私は不敵に笑う。だって、適当なことを言っている訳ではないのだから。

「ええ、分かっていますわ。私、信じていますもの。……。自分の才能を」

「？達也が、服部をボコボコにする必要は特にない。目立って面倒事を引き起こすリスクがある。

「？私はもう総代になってしまったのだ。怪しまれるのなら、全てこちらに寄せてしまった方がいい。

「えっ……。貴女がやるの？」

「？真由美が目丸くして、両手を口に当てた。

「それ以外に誰がいるんです？」

？私は首を傾げるが、服部が食い気味に言い募る。

「司波さん。たしかに、貴女は今年の総代だ。優秀な魔法力を持つているんだろう。だが、一年の差というのは大きい。やめておいた方が……」

「……舐められたものね」

？私は「意図的」に、自分の魔法制御を雑にした。一気に冷気が発生し、室内の温度がみるみる下がる。

？服部も真由美も、顔を蒼くしている。寒さからか、それとも……恐怖からか。

「自らの意思を通すために必要なのは、圧倒的な力です。私はそれを……よく知っていますわ」

？一瞬だけ軽く目を瞑り、先輩らに笑いかける。

「勝負をしましょう、服部先輩。——私が勝つたら……貴方の一年間の学びは、何の意味もなかったということですよ」